論文の内容の要旨

論文題目：国語教育と英語教育の連携―その歴史、目的、方法、実践―

氏名：柾木　貴之

本論文の目的は「国語教育と英語教育の連携」に関する歴史を記述した上で、歴史上の提言と実践を根拠に目的と方法を提案し、それに基づいて行った実践について考察を行うことである。2000 年以降、「連携」に関する議論はしだいに高まり、2017・18 年に告示された新学習指導要領では、小中高のすべての段階において、「連携」を推奨する文言が含まれるに至った。これにより今後、「連携」の実践は活発になっていくことが予想されるが、これまでの研究には不十分な部分が多くある。とくに、これまでに「連携」に関してどのような議論が行われてきたのか、現在までにどのような実践が行われているのか、そこからどのような目的と方法を提案することができるか、それを踏まえるとどのような実践ができるか、そして、学習者からどのような反応が得られるか。このような一連の問題群についての包括的研究は、これまでほとんどなされていないと言っても過言ではない。本論文はこれらの問題群について考察を行うことで、これから「連携」実践を行おうとする研究者・実践者に対して、基礎研究資料を提供することを目指すものである。

本論文ではまず明治期から現在に至るまでの歴史を記述した。その結果、明らかになったのは、「連携」に関する提言は明治期から現在に至るまで連綿と存在しているという点である。そして同時に見えてきたのは、100 年以上の時間的な長さに比べ、「連携」について論じた資料はごくわずかであるという点であった。この点について考察すると、その大きな理由としては、国語と英語の性格が大きく異なっていたということが挙げられる。国語と英語は言語能力の育成と人間形成を目標とする点で共通するが、国語は人間形成を重視する教科であるのに対し、英語は運用能力を高めることに多くの時間を割く教科である。

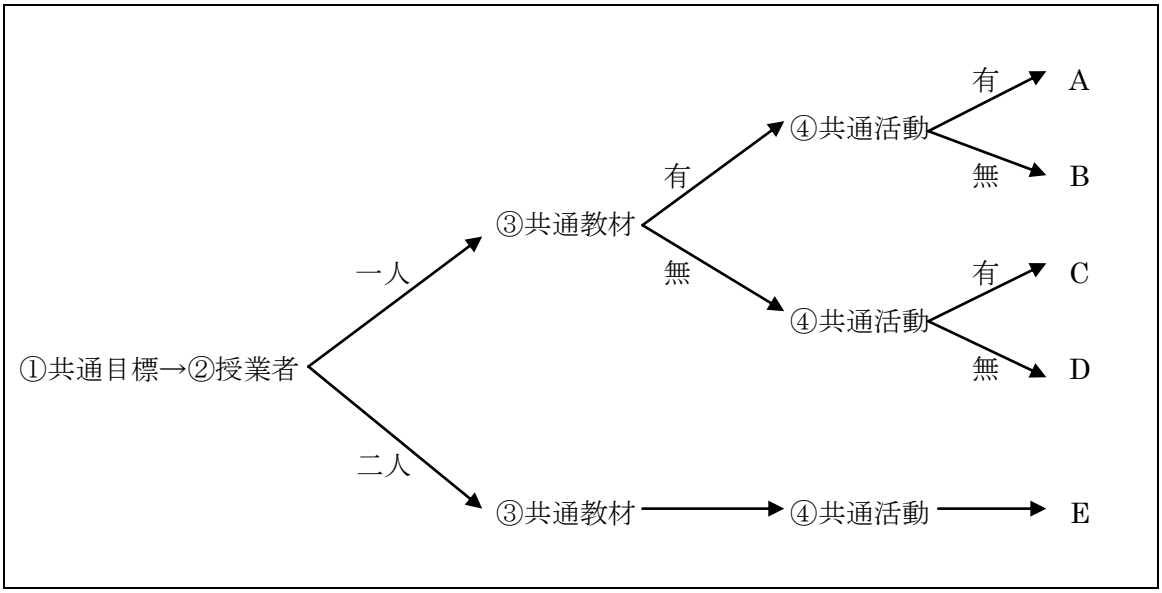
とくに戦前はこのような性格の違いが大きく、連携を行おうという発想自体、生じがたい状況にあった。そのような中、1960 年代頃から「言語教育」という概念が広まっていく。これは国語教育と英語教育を包括的に捉える理念であり、1970 年代にかけてはこの理念の下、国語関係者と英語関係者の間で「連携」に向けた議論が行われた。1980 年代に入ると、国語教育と英語教育の「共通の基盤」が模索され始める。「共通の基盤」とは国語教育と英語教育の「共通目標」と言い換えることができるものであり、具体的な言語能力・技術として、メタ言語能力、言語技術、共通基底能力、コミュニケーション能力の四つが「共通の基盤」になりうるものとして議論された。2000 年代になると、文部科学省が「連携」を後押しする政策提言を策定する中で、「連携」の実践を行う学校が現れ始める。公刊された資料に基づく限り、2017 年までに少なくとも 8 校が「連携」の実践を行っている。この 8 校の取り組みについて概要をまとめると以下のようになる。

	学校名	年度	共通目標	方法
1	帝塚山高校	2004-06	論理的思考力・表現力の育成	国語教員の授業、英語教員の授業
2	都城西高校	2005-07	ディベート能力の育成	同上
3	尾道東高校	2005-07	表現力の育成	同上
4	昭和女子大学附属昭和高校	2005-07	論理的思考力・表現力の育成	同上
5	高森高校	2006-	日本語・英語の特徴の理解	国語教員と英語教員の TT
6	那須高原海城高校	2014-	メタ言語能力の育成	同上
7	小牛田農林高校	2014-	日本語・英語の特徴の理解	国語教員の授業、英語教員の授業
8	香川大学教育学部附属高松中学校	2014-	日本語・英語の特徴の理解	国語教員と英語教員の TT

本論文では以上の歴史的記述に基づき、「連携」の目的と方法について提案を行った。まず「連携」の目的として提案したのは、(1) 生徒の言語能力向上、(2) 生徒の意識変化、(3) 教師の意識変化、の三つである。(1) については「連携」実践を行った学校が、いずれも何らかの言語能力の育成を目指して実践を行っている。上記の学校の中では、1-4 の学校が GTEC などの外部テストによって言語能力の伸びを示そうと試み、実際、テスト結果から、成績の伸びが確認できたと報告している。(2) の「生徒の意識変化」とは「日本語・英語という言語、及び国語・英語という教科に対する、生徒の見方や考え方の変化」と定義できるもので、例えば、7 の学校の生徒は「日本語をしっかり学ぶことは英語を学ぶ上でも大切だと思うので、今後はどちらもつながっていると考え、より一生懸命勉強に取り組みたいです」といった感想を記している。また、(3) の「教師の意識変化」とは「日本語・英語という言語、国語・英語という教科、及びその指導内容・指導方法に対する、教員の見方や考え方の変化」と定義できるものであり、例えば、1 の学校の国語教員は「意見を述べ

ること、public speaking については英語科に倣っている」と述べている。

次に「連携」の方法については、「共通目標」「共通教材」「共通活動」の三つから構成される方法について提案した。各校の実践を分析していくと、「連携」実践に向けては、①目標、②授業者（一人か二人か）、③教材、④活動、について決定する必要があることがうかがえる。①②の決定順、③④の決定順は前後する可能性があるが、①②③④の順に決定する場合を仮定し、それをフローチャートで表わすと以下のようになる。



「連携」実践は基本的に国語科と英語科で「共通目標」を設定した上で行われる。その際、実践に向けた流れは、②の授業者をどうするかで二つに分かれることになる。一つは授業者を一人とする A-D の場合である。この場合は国語教員が国語授業を行い、英語教員が英語授業を行う中で、共通目標の達成を目指す。もう一つは授業者を二人とする E の場合で、このときは国語教員と英語教員がチーム・ティーチングを行う中で目標の達成を目指す。以上のように「連携」の実践は A-D と E に分けることが可能だが、前者はさらに、③の「共通教材」と④の「共通活動」によって、A-C と D の二つに分けることができる。まず A-C は共通教材と共通活動のいずれかまたは両方を設定する実践方法である。この方法では目標だけでなく教材や活動も共通になるので、国語科と英語科の学習内容を結びつける方法として有効である。D は A-C に比べると、両教科の内容を結びつける点では弱いが、共通教材や共通活動に実践内容が拘束されることがないという点で自由度が高い。

本論文では以上の目的を踏まえ、C, D, E の三つの方法で実践を行い、考察を行った。まず C の事例として取り上げたのは中等教育学校の実践である。この実践ではメタ文法能力（文法がどうなっているのかを意識化して思考・説明する能力）の育成を目標に、「修飾・被修飾」「否定」「時制」をテーマとする三つの授業を実施した。そして、独自に作成した事前・事後課題テストの結果を分析するとともに、生徒の振り返りについても検討を行っ

た。その結果、事前・事後課題テストについてはわずかではあるが、得点の伸びが確認できた。また振り返りについては、「漢文や英語と現代文はつながっているとわかっているつもりでしたが、私は隔たりを感じてしまっていました。今回の授業でこれからつながりを意識できそうだと思いました」といった感想を得た。さらに、教員に対してアンケートを実施したところ、英語教員から「国語教員と関わる中で日本語文法の重要性を認識し、それを活かした英文法指導を行った」という報告を得た。D の事例として示したのは大学英語授業における取り組みである。この取り組みではメタ言語能力の育成を目標に年間で実践を行い、その結果、「『英語』という科目をこれまでとは違った視点で見ることができる授業でした。新たな『言語』の側面に出会えました」という振り返りを得た。また、一年間の授業で学んだこととして、「英語のときの独特ですてきな表現があっても、日本語にしたら、なくなってしまう事があること。言語が本来の意味だけでなくて、それを使っている人の文化や、大切にしているユーモアが含まれていること」を挙げ、言語の背景にある文化に言及する学生もいた。E の事例として取り上げたのは高校におけるチーム・ティーチングの実践である。これはメタ言語能力の育成を目標に松尾芭蕉の俳句などを用いたもので、授業の結果、「みんなで『あーだ、こーだ』いいながら、国語と英語を一緒に学んでいることで、言語の世界が広がった気がします」といった感想を得ることができた。

以上の記述から、「連携」は学習者にとって意義のある取り組みであると結論づけることができる。本論文で示した「連携」の主な意義は二つある。一つは「別々に存在する日本語と英語の知識・技能をつなげ、相互に関連した知識・技能の体系を築くことで、言語能力全体を高めること」である。つまり、通常の国語・英語の授業と「連携」授業とでは、言語能力育成に対して果たす主要な役割が異なっているのである。まず通常授業が果たす役割は個別言語の言語能力育成である。具体的には、国語授業では日本語の知識・技能を習得することで国語力の育成を目指し、英語授業では英語の知識・技能を習得することで英語力の育成を目指す。それに対して、「連携」授業が果たす主な役割は、通常授業で培った日本語と英語の知識・技能をあらためて確認しつつ、それまで別個のものとして存在した両者につながりを生み出すことで言語能力全体を高め、さらには、別の言語を学習するときの土台を築いていくことである。たしかに、国語力や英語力といった個々の言語能力自体は通常の授業で育成可能であるが、異なった言語知識・技能の体系につながりを生み出し、どの言語を運用する際でも土台となるような言語能力を高めることを目指す活動は、通常の教科の枠組みではほとんど行われない。このことから、上記の事柄が「連携」の第一の意義であると言えるのである。もう一つの意義は、「『言語』という視点を持つことで、複数の言語やその背景にある複数の文化を相対的に捉えること」である。このような複数の言語・文化を相対的に眺める視座は、現代の「国際化社会」と呼ばれる状況の下、国内外で重要性を増しているが、現在の国語・英語の通常授業では得がたいものであり、「連携ならでは」と言える部分が大きい。このように、具体的な事例に即して、「連携」の意義を明らかにした点に本論文の意義があったと言える。